

解答例

(1)

文章②で紹介されるののしり言葉に含まれる「二重の差別意識」とは、具体的にはモンゴロイド系の人々とダウン症の人々に対する差別意識のことである。これらの意識は、科学の歴史をたどると、人間の内部を生物学的に分類しようとする「人種」という概念、人間の「本来の姿」を想定し、そこから逸脱する存在を説明しようとする「退化」や「亜種」という概念の成立と関わっている。

では、なぜ科学的な言説に差別的なニュアンスが付与されることになったのだろうか。メンミによれば、人種差別的言説には3つの主張が含まれる。つまり、(1) 重要な生物学的差異にもとづく純粋な「人種」なるものが存在し、(2) なかでも純血種は他の種に優越しており、(3) それゆえ優越集団による他の集団に対する支配と特権が正当化される、というものである。二重の差別意識も、まさにこのような人種の純粋さと優劣をめぐる認識にもとづいていることが分かる。

(393 字)

解答例

(2)

我々の日常には、差異化や優劣の判断、純粹さに関わる思考の枠組みや制度があふれている。人種差別問題は、これら日常の多くの営みと構造において連続している部分があり、多くの人はそれに無自覚である。このことこそが、人種差別問題の難しさであると考えられる。

メンミが指摘した人種差別的言説の特徴には、人間を純然と区別すること、そのあいだに優劣をつけることが含まれていた。しかし、人間を区別し、優劣をつけ、優れたものを賞賛して場合によっては特権を与えるという営み自体は日常にありふれている。例えば、パラリンピックは非常に細かい基準で障がいのレベルを分類し、さらに国籍という区別も加えた上で優劣を争う祭典である。確かに、パラリンピックにおける区別は生物学的分類ではないという点で人種差別とは異なるかもしれない。しかし、後天的な優劣の判断を推奨し、先天的な優劣の判断を否定するには、また別の根拠が必要とされるだろう。後天的優劣は本人の努力に帰すものとしたとしても、そこに先天的な要素が含まれていないとは限らない。

一方で、メンミが指摘したもう一つの要素である純血性の信仰についても、それを間違いとするのはそれほど自明なことではない。例えば、生物多様性の保持にとって在来種と外来種の交雑は回避されるべきであるとしばしば主張される。しかし、その背後には在来種の純血性は保たれるべきという前提がある。それは、人種差別の背後にある純血性を優れたものとする考え方と共通する部分がある。そのような純血性の信仰を人間には適用すべきではないとする理由に、人間と他の動物は異なるからという説明しかないとなれば、それもまた薄弱な根拠である。

以上のような人種差別と通底する日常にあふれる構造は、たやすく差別へと展開してしまいう可能性を常にはらんでいる。我々は、そのような危険性に対して常に自覚的であるべきだろう。

(782 字)